研磨屋稼業はつらいよ♪

精密研磨稼業を展開中♪材料との「格闘」や日々、感じたことを紹介します。

研磨屋店主・カノン（canon）

第２回　「自分に何ができるかを考える人、できない理由を考える人」の巻

研磨屋として現場に立ち続けるには理由があります。ここにいて手を汚しながら削ったり磨いたりしていると時代の最先端を感じることができるからであります。時代を牽引してゆく最先端材料と出会い、自分の持てる知恵と工夫、そしてエンジニアとしてのセンスや「勘」といった技能を駆使して未知の加工領域に踏み込む時に今まで経験した事の無い加工現象や平滑化プロセスに直接、触れることができるという現場での「特権」に満ちています。つまり、新しい材料が開発されても使いものになるかどうかは加工屋の力量にかかっていることを意味しています。こんなに面白さ満載ですから止められんぜ♪

「自分は機械要員で言われた事以外の作業はやらない」という作業者もいます。量産工場ではそのように「同じモノを大量に造る」というコンセプトですからそれも大切なのでしょうし否定はしません。同じ作業の繰り返しで充実感を味わえるなら良し。でも、多品種少量生産の製造現場では量産とは相反する思考を要求されるもの。初めての材料、初めての仕様が寄せられたら「分かりません、知りません、できません」は御法度です。敢えて許されるとしたら「物理的にできません」という事ぐらいかしら？　自分に何ができるのかを考えた事が無い人は聞こえは悪いが給料泥棒です。こういう作業者、管理職が集まるミーティングは最悪で、取り組もうという方向に話しが動かず、「できない理由」を挙げるばかりで時間が長く実りが無いという共通点があります。皆さんの職場で似たような事例はありませんか？

不安要素が思い当たらない時しか首を縦に振らないなら失敗は無いでしょうが無難な加工、或いは競争力に欠けた「死んだ技術」に留まります。自分に何ができるかを常に考えるエンジニアは日々の研究とスキルアップに自分の時間を投資して進化し続けています。そのような姿勢で育まれる競争力や加工技術は変化しながら最先端の要求を満たす仕事に到達できるパワーがあるもの。現場で加工に携わる作業者、エンジニアは新たな事業を生み出す要素技術を身に付けるために社外の世界にも常にアンテナを張り巡らせて情報や動向に敏感である必要があります。新しい需要や技術に対して自分ができること、やるべきこと、これから身に付けておくべき知識や技能は会社が与えてくれるものではありません。それを選ぶのは製造現場で「自分に何ができるか」を考えている人自身ですから・・・。

効果的なグループミーティングでは新しい案件を皆に前もって知らせておき、実際のミーティングでは各自、その案件を達成するために自分にできること、やるべきことを各自に述べてもらいます。リーダーは何日かおいて進捗状況を把握するだけ。何をやるかは管理職が決めるのではなく現場が決めるというスタイル。さらに賢明なリーダーは予期できる障害についても意見を引き出します。こうしてプロジェクトは進行します。加工を経験しない管理職に案件内容を丸投げして良い結果が出たなんて聞いたことありませんからね～。若手の作業者をヤル気にさせるのが優秀なリーダーのあるべき姿ではないでしょうか。（我々のヤル気をダウンさせる人たちは大勢いますが・・・）

職場の雰囲気が作業者の将来を決めてしまうことも有り得るのだと最近は感じるようになりました。「できない理由」を考えるようになると自分の仕事に対して悲観的な気持ちしか湧きません。会社の姿勢を嘆くのに時間を費やさず、自分に何ができるかを常に優先して考えながら、技術＆技能を向上させましょう。そして外の世界に目を向けて新しい知識を吸収することも心がけると良いでしょう。（つづく）

ホームセンターで見かけた天然砥石。欲しいナリ・・・

「研磨屋稼業はつらいよ♪」ブログ
http://canon.air-nifty.com/cmp/